

東日本大震災被災地復興支援の報告

日本共産党大阪府議会議員 堀田文一

〒560-0033豊中市蛍池中町3-9-22電話06-6852-0029FAX06-6843-0761 Eメールb-hotta@hkg.odn.ne.jp

はじめに

私は、7月20日～26日の間、被災地復興支援ボランティアに参加するため、いつき澄江市議会議員や私の妻などの仲間7人とともに、岩手県に行った。

もちろん、私には腕力も技能もない。わずか5日間で被災者の皆さんの親身な相談相手になれるものでもない。しかし、被災地に行けば何かの役に立てるだろうと思った。

そして、被災地には行けないけれど、何かの手伝いをしたいと考えている人から救援募金や支援物資を預かり、被災者に届けることは、できると思ったからだ。

さらに、三陸海岸では津波で壊れた堤防と壊れなかった堤防があった。沢山の子どもが亡くなった学校もあったし、一人も亡くなかった学校もあった。どこに違いがあったのか教訓を見つけ出さなければと思ったが、視察という形では被災地に行きにくいし、短時日では素通りになってしまう。

それらの理由から、私はボランティアに参加し、大震災を体感しなければと思い、6泊7日の被災地復興支援ボランティア活動を組んだ。

準備に当たって

岩手県に行くのに飛行機や新幹線で行くと、時間は節約できるが、交通費は高い。現地に着いてからレンタカーを借りると、さらに高くつく。

私は、ボランティアに行くには「あご足つき」でいくべきだと思った。交通費と食費は

自分持ちということだ。それには、自動車で行くしかない。片道920km。ガソリン代も馬鹿にならない。一人、二人ではとても運転できない。2泊3日では、車での往復だけで、ボランティアをする時間がなくなってしまう。そこで、6泊7日の日程を組み、仲間と、救援物資、救援募金・救援活動協力金を募集した。

最大の難関は仲間探しだった。行きたい人は沢山いたが、6泊7日に参加できる人は少なかった。でも、あっちこちに声をかけて、7人の仲間を集めることができた。40代1人、50代2人、60代3人、70代1人、男4人、女3人、うち6人は自動車免許所持者という頼もしいメンバーだ。

支援物資や救援募金・救援活動協力金の募集のため、赤旗新聞にお願いの折り込みチラシを入れた。するとまず、自動車を日本共産党岩手県委員会に届けてという要請を受けた。私の8人乗りの車と、岩手県に届ける車の2台で、往路は7人がゆったり座った上で、たくさんの支援物資を積めることになった。

支援物資は、衣装ケースで10箱、段ボールで30箱も集まった。あまりにもぼう大だった。私の事務所は、集まった支援物資で身動きがとれなくなった。食器などの割れ物がある。殺虫剤キンチョールのような危険物もある。被災地では辞書や喪服、カレー皿、うちわが喜ばれるという情報にもとづき、重たい辞書類も集まった。それらの荷造りに手間がかかった。荷造りを終わると、2台の車に

は載せきれない量になっていた。宅配便にすると数十個になってしまう。そこで大量の荷物を運ぶ便を頼んだ。託して頂いた16万円の救援募金・活動協力金から、3万6700円の運送費を支払い、被災者に届ける殺虫剤、飴、傘などを買うこともできた。

7月20日

朝7時に豊中を出発。台風6号が接近していた。豊中では雨も風も弱かったが、名神・北陸道の米原 JCT 付近は前夜から台風による大雨のため通行止めになっており、今朝からは20km の渋滞も加わっていた。920km の長距離なのに、通行止めや渋滞があったのでは、今日中に岩手県に着けるのだろうか。

しかし、この6泊7日しかない。出発を延期すれば、日程が短くなる。この台風も大したことにならないだろうと楽観的に判断し、出発した。

まず、名神・桂川 PA で休憩し、米原付近の通行止めと渋滞の対策を考えた。雨による通行止めは前日の夕方以来続いているから、朝7時半には解除されているだろうと思っていたが、解除されていなかった。やむなく、京都東 IC で名神を出て、湖西道路を北上し、敦賀 IC で北陸道に入る迂回作戦をとった。おかげで車は順調に走れたが、北陸道・南条 SA でも米原付近の通行止めは続いているとのニュースを得た。一体、米原付近の雨による通行止めは、いつまで続いたのだろうか。迂回作戦のおかげで、1時間を余分に費やしたが、この調子なら今日中に岩手県一関市にある日本共産党のボランティアセンターに到着できそうだ。

道中の様子を書くのは本題ではないので、その時、強く感じたことをいくつか書く。

一つは石川県から富山県にかけて、北アル

プスの残雪が見えたこと。最近、北アルプスとはご無沙汰しているが、また行きたくなった。

黒崎 PA でガソリンを補給したが、快晴かつフェーン現象で、猛烈に暑かった。台風はどこに行ったのかと思ったが、この猛烈な暑さが台風なのかもしれない。

磐梯 SA では会津磐梯山を背景に記念写真を撮ったが、磐梯山の頂上は雲に隠れていた。

東北道に入ると、強い雨が降り出した。また、台風なのだろうか。

夜7時20分、一関 IC に到着。ここからはカーナビの世界。私はカーナビを持っていないので、友人からカーナビを借りた。しかしこのカーナビは10年前の機械。そのため、目的地の日本共産党両盤地区委員会はこの10年以内に移転したことがあり、電話番号では正確な目的地を登録できない。住所は長すぎて正確な設定ができない。

結局、略図を頼りに暗い街を走り、7時30分、無事に日本共産党両盤地区委員会に到着。

日本共産党も、東日本大震災被災者支援はカウンターパートナー方式で支援を進めている。私たちの大阪は岩手県の大船渡市や陸前高田市を管轄する日本共産党気仙地区委員会を支援する。ただ大船渡や陸前高田には手頃な宿泊施設がないために、隣の一関市を管轄する両盤地区委員会のボランティアセンターに泊まり、そこから毎日片道60km のドライブをして陸前高田に通うわけだ。

明日の活動内容について打ち合わせの後、近くのコンビニで買った弁当で夕食をすませ、11時に就寝。長い一日だった。

7月21日

昨夜のうちにコンビニで買ったおにぎりやサンドイッチを食べ、朝8時、一関の両盤地

区委員会を出発。県道19号線と国道343号線を経由し、矢作川が流れる谷を下って、陸前高田市の街にはいる。

街の入り口にたつと陸前高田は、広大に続く平原、山裾には壊れた家が点在しているが、遠方のがれきを積み上げた山と数棟の4～5階建ての建物が見えるのみ。JRの鉄橋は川の中で切れていた。



9時半、市街地から少し山に入った鳴石地区にある市民の声・日本共産党共同支援センターに到着。

ここは陸前高田市長を支える市民の声と日本共産党の共同支援センターで、常時、全国からあつまる支援物資を並べ、被災者が自由に持ち帰られる青空市を開設している。私たちボランティアを受け入れ、活動内容を指示してくれるところでもある。

まず、このセンターで本部長をしている藤

倉市議員とお会いした。藤倉議員は昔、選挙の応援で私の事務所まで来てくれたことがあるという。私は覚えていませんがというと、その時、日食の写真をもらいましたよと言われた。これは本当の話だ。忘れてしまっていて申し訳ない。ただ、日食写真は津波で流されたようだ。残念。



センターで働いている人たちと挨拶をすませ、早速、近くの相川と下壺にある2つの仮設住宅に行く。そこで、今日の午後に住宅内で臨時青空市を開設することをお知らせし、入居者の要求や意見を聞いて回る。入居者は、仮設住宅に入れたことを喜ばれている方や、届けられる支援物資に感謝される方が多かった。部屋が狭い、買い物が不便などの現実的な不満もあった。ただ、何もかも無くなったというのが津波被害の実態。生活再建の道は、まだ遠いようだった。

午後、相川と下壺の仮設住宅に行き、支援物資の臨時青空市を開く。もちろん代金は要らない無料市だ。食器や女性の下着、お米に人気が集まっていた。

下壺仮設住宅の敷地は、今年2月まで市長を勤められていた中里長門さんが県に無償提供したものだ。中里さんがその隣に住んでおられるので、訪問した。中里さんは4期16年、日本共産党の陸前高田市議員を勤めた後、



下壺仮設住宅での青空市

2期8年、陸前高田市市長を勤められた。東北地方では珍しい日本共産党員市長さんだった。病気のため、2月の任期満了で市長を引退された。その直後に、陸前高田を津波が襲った。中里さんは、あいにく病床に横たわったまま



破壊されたスーパー

だったが、被災した陸前高田市民のことを大変心配されていた。



破壊された陸前高田市役所

午後4時、ボランティア活動が終了。

その後、5月から2ヶ月半、北隣の大船渡

市に泊まり込み、被災者支援活動をしている大阪の鈴木さんに、被災地を案内してもらった。陸前高田市街地では堅固な建物はいくつ



破壊された市民会館

か残っていたが、内部は完全に破壊されていた。破壊されたスーパー、市民会館、市役所、4階まで水に浸かった雇用促進住宅などが目



4階まで水に漬かった雇用促進住宅

に付いた。

街全体は、ガレキや自動車の残骸があちこ



何もなくなった陸前高田市街地

ちに集められていたが、広大な空白になっていた。



両方の海から津波に襲われた地区や完成目前で津波に破壊された野球スタジアムなど無惨な姿も見た。JR大船渡線は至る所でレールまで流され、復旧のめどは全く立っていないようだった。



津波の破壊力がなぜこんなに大きいのか。人間は技術の力でなんでもできそうな顔をし

ているが、自然の前ではちっぽけな存在であることを改めて実感した。

ある地区で、家の片付けをしている親子に出会った。ご近所の方は公民館に避難し、そこが津波に流されて、ほとんどの人が亡くなったそうだ。「3mの津波警報」をテレビで聞いたが、その程度なら大丈夫だと高をくくったのが、沢山の方が亡くなった原因だと思いと語られていた。

2時間ほど被災地の現状を案内して貰った後、気仙沼市と国道284号線をとおり、1時間15分かけて一関のボランティアセンターに帰った。

その後、願可(がなが)之湯という500円の日帰り温泉に、みんなで車に乗って行く。

帰りにスーパーにより、晩ご飯の材料を買い揃える。

8時半、センターに帰る。3人の女性が中心になって晩ご飯を作り、9時半、ようやく夕食。食器洗いが得意の男性もいて、段取りよく夕食が終わった。

7月22日

朝8時、一関のボランティアセンターを出発。

9時15分、陸前高田の市民の声・日本共産党共同支援センターに到着。ミーティングの後、小友地区の柳沢と財当にある2カ所の仮設住宅に行き、入居者の要望や意見を聞いて回る。

昨日と同じく、仮設住宅に入れたことや全国から沢山の支援が届けられていることへの感謝の言葉をよく聞いた。財当の仮設住宅は高台にあり、津波が右手と左手の両方の浜から押し寄せてきた様子を見ていた人に話を聞いた。沢山の家があったが、全部流されて野原になってしまったと残念そうだった。

昼食は毎日、共同支援センターの近くのコンビニの仮設店舗で弁当を買う。食堂は近く

右と左から津波に襲われた小友地区



に、1軒も再開していないからだ。私が毎日通う支援センターのすぐ隣に、プレハブの陸前高田市役所仮庁舎が建てられている。本庁舎が津波で完全に破壊されたからだ。隣の市役所仮庁舎で働く職員や全国から応援にきている職員も、みんなこのコンビニを利用している。神戸市の名札をつけた職員もいた。コンビニの中は活気があふれていた。

ガソリンスタンドは2軒再開したが、1軒は建物も屋根もヒサンも、代金を自動計算してくれる給油機もない状態。それでもタンクとポンプ、ホースがあれば営業は再開できるというわけだ。この店で給油していただいた時、私はありがとうございますとお礼を述べた。

弁当をセンターのテントの下で食べている時、一陣の風が吹き、弁当にも砂がかぶった。ただその砂は、ものすごく細かい砂で、気にせず食べ続けることにした。この砂も津波が持ち込んだものだろうか。

午後1時40分、お隣の住田町に建設された中里仮設住宅に、臨時青空市を開設しに行く。ここは陸前高田から車で30分もかかる位置にあり、大船渡や釜石の被災者も入居していた。それほど仮設住宅の建設用地にも困っている

ということだろう。遠い山の中にあるへんぴな場所にあるだけに、臨時青空市は大変喜ばれた。



木造戸建ての中里仮設住宅で青空市

住田町仮設住宅は地元町長の尽力で、地元産の杉を使った木の香りがする1戸建ての仮設住宅だった。住み心地がよいと、入居者からは評判がよいようだった。

午後4時、支援センターでの活動が終わったので、陸前高田市役所に行き、陸前高田市役所への寄付金を渡した。



陸前高田市役所仮庁舎

市役所に寄付するお金は、義援金と寄付金の2種類に分けられる。義援金は市役所を介して被災者に届けられるお金で、市役所は自由に使えない。

寄付金は、市役所が何に使ってもいいお金。陸前高田は、市役所自身も被災者だが、市役所ががんばれなければ、被災者の生活再建、街の復興はできないと思い、私は、市役所が

一番いいと思う形で使ってほしいと思い、14万円を寄付金としてお渡しした。

4時30分、高田松原の一本松を見に行く。高田松原は全国的にも有名な松原で7万本の松が並び、文字通り白砂青松の地だった。その松原が津波に襲われ、松の木は全部なぎ倒され、流されてしまったが、2本だけ残った。1本は幹だけが残し、1本は枝も葉もついた完全な形で。いま陸前高田では、この松が希望の松となっている。そこで希望の松が枯れないように、幹を緑色の包帯のようなものを巻き、ポンプを動かしていた。傍らには真新



しい父母地蔵が建っていた。



帰り道、スーパーに立ち寄り、晩と朝のご飯の材料を買う。

夕6時30分、一関の支援ボランティアセンターに着く。

晩ご飯の後、20、21日の2日分の府議会日

記を書き、ホームページの編集長に送る。

7月23日

朝8時、一関の支援ボランティアセンターを出発。

9時15分、陸前高田の共同支援センターに着く。

その後、常設青空市の開店準備作業。

午前10時20分、長部小学校の運動場に建っている仮設住宅に行く。住宅を1軒1軒周り、「今日の午後2時、この住宅に臨時青空市がきます」とお知らせして回る。

昼食は、今日もコンビニ弁当。

午後1時半、震度4の地震があった。M6.4だった。数分後に固定スピーカーから津波注意を呼びかける町内放送があったが、津波はなかった。

その後、みんなは臨時青空市へ行ったが、私は共同支援センターに残り、赤い棒を持って青空市を訪れる車の整理をする。



4時、活動が終わったので、青空市の店長さんに446mの箱根山に案内してもらう。箱根山は見晴らしのいい山だが、あいにく雨だった。そして見えたものは、津波で根こそぎ掠られたような平地だった。

夕6時、一関の支援ボランティアセンターに帰る。

その後、車で温泉に行き、スーパーで買い

物をする。

夕食は、時間に余裕があったので、クリームシチュー、ハンバーグ、鰹のたたきという
外食では味わえない豪華メニューになった。
女性3人を中心に夕食作り。私は府議会日記
書き。

夜9時、ようやく晩ご飯。

7月24日

朝5時半、はじめて一関のボランティアセ
ンターの周りを散歩する。センターの前は立
派な国道で車が賑やかなところだが、裏手を
歩くと、ウグイスの鳴く丘陵地帯だった。丘
陵地帯の真ん中を新しい工事中のバイパス国
道が走っていた。すぐ近くに工場団地もでき
ている。開発が進められているのかなと思っ
た。

8時15分、ボランティアセンターを出発。

9時27分、陸前高田の共同支援センターに
着く。

打ち合わせの後、4人でお隣の住田町の火
石地区と本町地区に設けられた仮設住宅に行
き、午後から臨時青空市をそれぞれの住宅で
開設しますと案内するとともに、被災者の意
見や要望を聞いて回る。



木造戸建ての本町仮設住宅

津波に襲われた土地を国に買って欲しいと
の注文を聞いた。国が土地を買っても使い道
は簡単にはないが、すべてを流された被災者

の生活再建には、これしかないという方策だ。

息子夫婦が亡くなって、孫だけが生き残っ
たおばあさん、高校の水泳部で練習中の娘さ
んを亡くしたお母さんに会った。お二人と
も明るく振る舞われていたが、詳しい話はと
ても聞けなかった。

お昼は今日もコンビニ弁当。

午後、午前中に訪問した仮設住宅で、臨時
青空市を開設。

午後4時、市民の声・日本共産党共同支援
センターでの活動はこれで終わり。記念に写
真を撮る。



共同支援センターの人たちと

その後、真宗大谷派の機関紙同朋新聞で、
お寺を避難所に提供しながら、ご自身は市役
所に勤務し、被災者救援でがんばっていると
紹介されていた気仙組正徳寺の住職さんを訪
ねる。震災後4ヶ月以上が経過していたが、
正徳寺は今も、避難所として活用されていた。
私は、心ばかりのお布施をした。

その後、陸前高田の共同支援センターから
30分ほどにある大船渡市の碁石海岸に行き、
民宿海楽荘に泊まる。一関から陸前高田まで
の毎日の通勤はきつかったが、最後に近づい
たので、民宿に泊まった。碁石海岸は砂の代
わりに碁石のような石がぎっしり詰まってい
る海岸。波が寄せてくると、砂利をばらまく
ように聞こえる。また、波が岩に当たって砕

ける景観も豪快。ただ、荒波というのは少し怖かった。

7月25日

未明3時40分頃、震度4の余震あり。阪神淡路大震災の時は、1ヶ月間は何度も余震があったが、東北地方では4ヶ月が経過しても未だに大きな余震が続いている。恐ろしいことだ。

朝9時、大船渡市にある日本共産党気仙地区委員会に行く。大船渡市は、一面が野原となった陸前高田と違って、津波被害を受けていない建物も沢山あった。

午前、大船渡市の碁石海岸地区の仮設住宅に行き、臨時青空市を開く。

以上で、岩手県気仙地区でのボランティア活動を終える。

午後2時半、世界遺産の中尊寺に立ち寄る。

午後6時20分、福島県二本松市岳温泉に行き、農民運動全国連合会副会長・福島県農民連事務局長を努めながら岳温泉の近くで農業を営む根本敬さんと懇談。

まず、線量計という放射能の検知器を見せていただいた。懇談の場所では0.09マイクロシーベルト/時という数字がでていた。別に問題のない数字だそうだが、こんな機械が福島ではありふれた機械になっていることに恐ろしさを感じた。

そして、福島県の農業や畜産業が原発事故で甚大な被害を受けていること、被害がいつまで続くのかわからないこと、全ての被害に補償がでるのかも分からないこと、それでも「福島を離れない。自然エネルギー・小エネルギーの社会になれば、土地と自然がいっぱいある福島県は自活できる県になる」と意気込みを語られたのに、一同感銘を受けた。

大体、風評被害という曖昧な言葉がある。販売しても問題のない農産物が、売れない、売れても価格が低いことによる被害だ。被害者は農民、加害者は東京電力という関係は明白だが、原発事故と風評被害との因果関係が明確でないとして、風評被害への補償はなかなか進まない。

全ては原発事故が原因なのだから、東電が責任を取るべきだとして、農民連は現在、国や東京電力に強く申し入れるとともに、農産物の放射能を自前でチェックするため200万円もかかるフランス製の放射性核種分析装置(ゲルマニウム半導体分析装置)購入資金を募っている。この募金に、大阪から預かってきた救援募金・救援活動協力金のうち8万円を充てさせていただいた。

夜、根本さんに紹介された岳温泉喜ら里に泊まる。

7月26日

朝4時半に目が覚める。もう、すっかり明るくなっていた。大阪より、ずっと高緯度、ずっと東よりのためのようだ。早すぎるのもう一寝入りした。

6時半、起床。安達太良山に登る道を少し歩く。昔、高村知恵子が「本当の空を見たい」と言ったという歌があったが、歌の通り、安



達太良山界限は空気の澄んだ涼しいところだ

った。道ばたにユリの花が咲いていた。

9時、旅館を出発。地元スーパーに立ち寄って土産の桃を買い、二本松インターから高速道路にはいる。東北・磐越・北陸・名神自動車道にまたがる700kmを7人のうち6人が交替して運転する。往路は、昼食も車中で弁当を食べ、ともかく先を急いだが、帰りは、昼食だけはサービスエリアで取った。

夜8時半、自宅に帰着。全走行距離は7日間で約2500km。私の車もよく走ってくれた。私は、13年前に初めて新車を買ったが、その車が今回の車。車はありがたいなと感じた。また、6人で運転が交替できたから、危ない目にも合わず、走り切れた。この点もありがたかった。

結びに代えて

震災復興の展望

津波で壊滅的な被害を受けた陸前高田では、仮設住宅の建設が進み、スーパー、コンビニなどの仮設店舗も建ちはじめ、応急対策は進んできた。

今後の震災復興にとっての最大の課題は、街と住宅の再建である。街をどこに再建するのか。津波がまた襲ってくる平地か、津波が襲わない高台か。答えは、高台と決まっているようなものだが、誰が街や住宅を再建するお金を出すのか。国が、津波に弱い平地を買い上げ、そのお金を元手に住民が街や住宅を再建するのが、一番、現実的な再建方策と思う。仮設住宅入居者からも、そんな意見を聞いた。しかし、国会では、辞める、辞めないの泥仕合が続き、政府は復興のビジョンを出せていない。一刻も早く、国が復興ビジョンを示すことが求められている。

ボランティアの役割

震災直後なら、大型重機が使えないような場所で、人手を使った片づけ・掃除が主なボランティアの仕事だったろうが、私が訪れた時には、仮設住宅に入居している被災者を激励すること、全国の人々が被災者を応援したいと考えていることを、身をもって伝えることが、ボランティアの役割だと思った。今の時代、競争、自己責任、自助努力などの言葉が飛び交っているが、私は助け合って生きていくことが、日本だけでなく、世界中の人間の生き方だということを示したかった。その役割は、ごくわずかだが、きちんと果たせたと思った。

2度と大津波被害を繰り返さないために

岩手県北部の普代村では、大田名部地区で高さ15.5m、全長155mの防潮堤があり、普代地区で高さ15.5m、全長205mの水門があり、ともに津波を撥ね返し、犠牲者は出なかった。

岩手県宮古市田老町の防潮堤は、高さ10m、延長2,433mで「万里の長城」といわれていたが、津波は防潮堤を越えて街を襲い、死者・行方不明合わせて200人の犠牲者が出た。

陸前高田市では、浜は約3kmもあり、防潮堤はわずかなものだった。避難するにも周りの山が遠かった。結果、死者・行方不明合わせて2000人の犠牲者を出した。岩手県では最悪の被害だった。

防潮堤は、高くて頑丈な方がいいことは結果が示している。しかし、普代村の防潮堤・水門は延長が短い。両側の山が迫っている地形なのだろう。ところが、田老町の浜はもっと広く、陸前高田さらに広い。広い浜にどんな津波も跳ね返せる高い防潮堤を作るのは、

簡単ではない。無防備は良くないが、平地に安全な避難施設を作る、街を高台に移転するなど、様々な方策の併用も必要だ。

その土地に適合した津波対策を、地元の住民と役所が考え、それを国や県が支援するシステムが必要なのだろう。

今回の津波被害にとって、地震の直後に気象庁が発表した「3mの津波警報」が、人々の警戒心を緩ませたことは無視できない。気象庁が最初から「10m以上の大津波警報」を出していれば、犠牲はもっと小さくできただろう。この機会に日本の災害警報システムを根本的に見直すべきだと思う。

2度と原発事故を繰り返さないために

福島原発事故の影響は、立ち入り禁止区域となっている福島県の一部だけでなく、福島・宮城・岩手県全域の牛肉の出荷停止に見られるように、広大な範囲に及んでいる。しかも、何時になれば放射能問題が解決するのか、全くメドは立っていない。原発事故は最悪だ。

しかも、原発は事故を起こさなくても使用済み燃料(核のゴミ)を作り続ける。未来の世代に借金を残してはならないが、それ以上に未来の世代に核のゴミをさらに増やして残すのは許されない。

電力業界は、やらせメールや賛成発言を組織して「原発は必要」の世論づくりをしてきた。財界は「原発を廃止すれば日本経済は失速する」とのキャンペーンを繰り返している。

しかし、イタリア・ドイツ・スイスは原発に頼らずにエネルギーを確保しようとしている。原発を止めて、自然エネルギー開発に日本の力を注げば、日本の科学技術は発展し、日本の未来も開かれる。

原発は廃止するしかない。そのために力を

尽くしたい。

大阪府議会災害対策調査特別委員会で

大阪府は、地震・津波対策の見直し作業を始めた。大阪府議会も7月に災害対策調査特別委員会を発足し、地震・津波対策のあり方についての提言を1年がかりでまとめようとしており、私は日本共産党を代表してその委員の一人になった。今回の東日本大震災被災地復興支援ボランティアで体験したことも生かして、大阪の新しい地震・津波対策づくりをリードしていきたい。